



IT 化と新聞

■ 松村 由利子

ことさらに「紙の新聞」と言わなければならない時代になった。

考えてみれば、新聞の歴史はそのまま、情報通信における技術革新の歴史といってもよい。私が新聞社に籍を置いた 20 年余りを考えても、その変化は目まぐるしかった。

地方支局に赴任した 1986 年当時、原稿は水性のサインペンで原稿用紙に書いていた。それをデスクが赤ペンで直し、パンチャーさんが漢字テレタイプで打ち込んで本社へ送信するのである。急ぎの原稿はパンチャーさん経由でなく、ファクシミリで本社へ送った。

写真は電送機で送っていた——というと簡単そうだが、撮影したフィルムを自分で現像し、よいコマを選んで印画紙に焼き付け、それを電送機の円柱のドラムに巻いてセットし、本社に連絡してから送り始める、という一連の手作業を伴うものだった。

入社したころは、まだ一部に鉛の活字が使われていたが、やがてコンピュータ組み版へ全面移行し、記者はパソコンで執筆、送稿するようになった。写真もデジタルカメラで撮影し、画像データを処理するという省力化が実現した。

しかし、IT 化が進んで最も変わったことは、こうした技術面よりも読者の意識の方だった。パソコンのユーザが増えて Web ページやブログを開設する人が増えたのに続き、カメラ付き携帯電話、スマートフォンが相次いで普及し、SNS への投稿がたやすくなった。誰もが文章と高画質の写真を全世界に向けて発信できるようになり、活字媒体に対する敬意や信頼といったものが急速に薄れ始めた。

■ 松村 由利子
歌人

1960年福岡生まれ。1986年毎日新聞社入社。2006年からフリーランスに。歌集に『大女伝説』（葛原妙子賞）、『耳ふたひら』など。評論『与謝野晶子』で平塚らいてう賞、エッセイ集『31文字のなかの科学』で科学ジャーナリスト賞を受賞。



「新聞沙汰になる」が脅しとなるかぎりまだ新聞は健在である

松木 秀『親切な郷愁』（2013年）

「新聞はとるのやめたの」親指と人差し指で画面広ぐる人

水上比呂美『潤み朱』（2014年）

紙の新聞を読む人は減り続ける一方だ。上記のような歌が作られているというのは、もうかなり状況が厳しいことを意味する。新聞社で働いた身としては、ため息まじりに「画面広ぐる人」の指先を眺めるしかない。「新聞沙汰」という言葉も、すでに死語になっているような気がする。

しかし、技術が変化し続けても、一人ひとりの記者が現場で取材して一次情報を得るといふ報道の基本は変わらない。この最も人間的で手間のかかる行為さえ守り続けられれば、メディアとして生き残れると信じたい。

情報は生きものである。世の中にはデジタル化されていない情報が山のようにあり、それをつかみ取るのは人間にしかできないことだ。一人の人間の中には言語化さえされていない多くの情報がしまい込まれている。それを引き出すのが記者の仕事である。

メディアの数は多ければ多いほどいい。その多様性は、最新のデバイスを使えばすべての情報が瞬時に得られるような錯覚を正してくれるからだ。現在の新聞のビジネスモデルは日露戦争のころに確立したと言われ、すでに100年以上が経過した。時代に対応した新しい「新聞」の形はきっとあるはずだ。

